ICTニュース

大阪府済生会中津病院　感染対策チーム

2018年6月号
Vol.58
（2018年6月5日発行）

溶連菌性咽頭炎・梅毒について

6月は**A群溶血性連鎖球菌咽頭炎（溶連菌性咽頭炎）**が最も流行する時期です。溶連菌性咽頭炎は、A群溶血性連鎖球菌に感染後潜伏期間を経て咽頭痛、発熱、全身倦怠感で発症し、咽頭や扁桃に白苔が認められることもあります。小児を中心に流行しますが、成人で発症する場合も珍しくありません。感染経路は**飛沫感染**、**接触感染**ですが、保菌者からの感染も多く、効果的な感染対策を行うことは困難です。発症した場合は抗菌薬投与による治療が必要です。また、発症の頻度は異なりますが溶連菌感染症としては、この咽頭炎の他に伝染性膿痂疹、リウマチ熱、急性糸球体腎炎、血管性紫斑病とその病態は多彩であり、近年では**壊死性筋膜炎の原因菌**としても知られています。図は溶連菌性咽頭炎の2004年以降の流行状況を示したグラフです。例年3月、6月、12月頃に患者数の増加がみられますが、前述したように6月は年間を通して患者数が最も多くなる時期です。溶連菌性咽頭炎の報告数の推移には注意が必要です。

次に**梅毒**です。梅毒トレポネーマと呼ばれる螺旋状のグラム陰性菌（スピロヘータ）を病原とする感染症です。大部分は排菌している感染者との粘膜の接触を伴う性行為や疑似性行為によって感染しますが、他に感染した妊婦の胎盤を通じて感染する経胎盤感染があり、先天梅毒の原因ともなります。病期は《**①早期顕症梅毒第Ⅰ期、②早期顕彰梅毒第Ⅱ期、③潜伏梅毒、④晩期顕彰梅毒**》の4つに分類されますが、症状のない潜伏梅毒の期間が長く、晩期梅毒を発症するまで診断に至らない可能性もあります。昨年に引き続いて梅毒を取り上げたのは、**東京、大阪等の大都市を中心に患者数が急増**してきているからです。2010年の全国での梅毒の累積患者数は621でしたが、2016年4518、2017年5770と急増してきており、2018年に入ってもその勢いは止まっていません。特に大阪の年間の患者報告数は、2016年583、2017年831と大きく増加しており、2018年は第21週までの累積報告数が445（2017年第21週では255）と患者数の急増が続いています。現状のままでは、2018年の大阪府の報告数は1000例を大きく上回ることが予想されます。今後共患者数の推移を含めた梅毒に関する情報についてもご注意ください。

（感染管理室　安井良則）

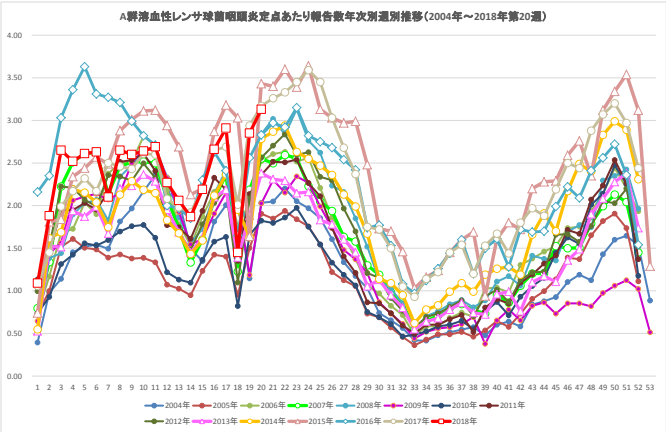


図. A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の小児科定点当たり報告数の年次別週別推移（2004年～2018年第20週：感染症発生動向調査より）

今年もやります！流行性ウイルス疾患抗体価フォローアップ検査

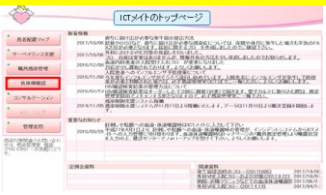
当院では、平成24年に全職員を対象として4種の流行性ウイルス疾患（麻疹・風疹・水痘・ムンプス）に対する抗体価検査を実施しました。以降、毎年新入職員（中途採用者も含む）に抗体価検査を実施し、もれなく抗体価の把握を行い、基準に満たない者についてはワクチン接種を勧奨しています。抗体価検査の有効期限は文献やガイドラインを参考に当院では「5年」と規定しており、平成29年度より**5年毎に4種抗体価のフォローアップ検査**を行うこととなりました。そして、今年も昨年に引き続き、抗体価のフォローアップ検査とワクチン接種を行います。**年に1度の大チャンス**です！近日中に各部署へ対象者リストを配布します。対象者の皆様、是非この機会に検査を受け、**抗体価の把握**と**ワクチン接種**にご協力をお願いします。

（感染管理室　川口尚子）

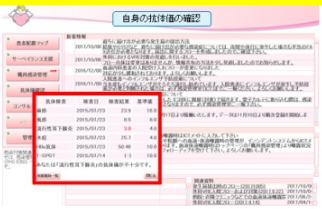
抗体価を確認してみよう！

①ICTメイトのアイコンをクリック

②抗体価確認をクリック



③ご自身の抗体価が表示されます！



5月の活動報告

看護フェア参加

デイケア勉強会

専門コース「感染管理」研修